

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 森平雅彦

本論文は、918年から1392年まで朝鮮半島に存在した高麗が13世紀後半から14世紀半ばにかけてモンゴル帝国の中核政権である元の政治的影響下におかれた時期を対象に、高麗と元との国家間関係の基本構造を解明しようとしたものである。

高麗にとってこの時期の対元関係は、従来大陸の王朝との関係のような名目的なものではなく、一定の実質性をともなう宗属関係として高麗国内の政治・経済・社会・文化の各方面に多大な影響を及ぼした。その意味で、高麗・元関係の解明は、高麗史はもちろん、広く中世朝鮮史の理解において重要なテーマであり、すでに多くの研究成果が蓄積されている。しかし、それらは総じて両国関係の構造を体系的に追究しようとする姿勢に乏しく、しかもモンゴル帝国史研究の最新成果を十分に踏まえておらず議論の前提となるべきモンゴル帝国史の理解に正確さを欠くなど、根本的な次元で少なからぬ問題点を残している。

本論文は、こうした既往の研究の問題点を克服すべく、高麗国王・王室の対元関係上の位置づけに関わる制度・慣例を逐一抽出してその詳細を個別に解明し、そのうえで高麗・元関係の基本構造の体系を提示しようとした。しかもその際、近年におけるモンゴル帝国史研究の史料情報と研究成果を積極的に活用し、モンゴル帝国史研究者からの批判に堪えうる議論の水準を目指した。研究史上における本論文の第一の意義はこの点にある。

高麗・元関係の基本構造に関わる制度・慣例として本論文が考察対象とするのは、高麗王室・元帝室間の通婚関係とそれにもとづく元帝室からの公主降嫁およびその結果として高麗国王が獲得した駙馬高麗国王という地位、高麗王家が元に送遣した禿魯花(トルガク)という質子、高麗・元間を往来した公文書の書式、高麗国内に設けられた元の駅伝制である站赤(ジャムチ)のルート、遣元高麗使節による対元交渉の実態などである。これら多様な事象についての手堅い実証研究を通して、多くの新知見・新事実が明らかにされた。

それだけではなく、本論文はまた、高麗の在来王朝体制の保全に関する元の政策決定の制度的枠組みについても考察し、高麗・元関係を基礎づけたとされる「世祖旧制」をめぐる韓国学界での通説が成り立たないことを論証した。さらに、本論文での議論の総括として、如上の個別の諸制度・慣例が高麗・元関係のなかでどのように関連していたのかをそれらが全体として果たした機能の側面から考察した。そこで注目されたのが、元が高麗を東方辺境防衛の担い手として位置づけ、高麗もまたその役割を自任して自国の利害の主張に利用していたという事実であり、そこに高麗・元関係における固有の性格を見出した。

このように、本論文は高麗史研究の重要テーマに正面から取り組み、多くの新知見・新事実を提示するとともに、通説的理解に見直しを迫るものとして、研究史上に大きな意義をもつ。それと同時に、モンゴル帝国史研究の最新成果を多く取り入れることで、議論を高麗・元関係という二国間関係に閉じたものにせず、モンゴル帝国の外交秩序という大枠において高麗・元関係を考えるという視角がつねに意識されている点も高く評価できる。本論文が逆にモンゴル帝国史研究に与える影響も少なくないであろう。

論文の構成、引用史料の提示方法や文章表現の面でさらなる工夫の余地が認められるが、それらは本論文の内容に関わる決定的な瑕疵とはいえない。よって本委員会は、本論文を博士(文学)の学位を授与するにふさわしい業績として認めるものである。